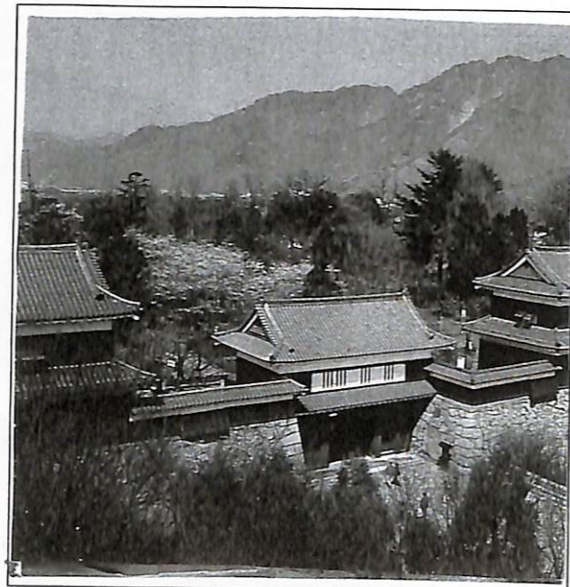


城と史跡を歩く会\*第35回(最終回)

「信濃路の小諸城と上田城を歩く バスツアー」



小諸城



上田城

平成16-10-23 (土曜日)

城と史跡を歩く会

バス席表

出入口側

運転手側

1	小出惣治	山岸弘明	高澤恒子	鷺津寛子
2	佐倉光子	桑原絹枝	皆川 清	藪本テイ子
3	千葉範子	鈴木ケ子	竹土成 <sup>←</sup>	柏 葉
4	板垣マコ	中村節子	卯月富子	市原享子
5	齋藤定子	青木律子	白 土	西村澄子
6	吉池所子	吉池一彦	猪野春枝	吉水正子
7	山城美智	荻田恵子	藤沢真知子	田中勝子
8	加藤幸子	鈴木洋子	柳沼房子	神林敏夫
9	淡木奎吾	板倉満	高城正雄	高城富子
10	若菜茂世	山田恵美	渡辺清枝	鈴木淳子
11	小北絢士	小野芳樹	針 勝昭	筈島 稔
12	金子昭夫	大谷勝男	高沢毅	近久芳彦 小山章一

世話人分担

山岸=ご案内

小出=総括進行

高澤毅=進行

高澤恒=会計、五井駅乗車担当

鷺津、藪本=総務、八幡公民館乗車担当

協力

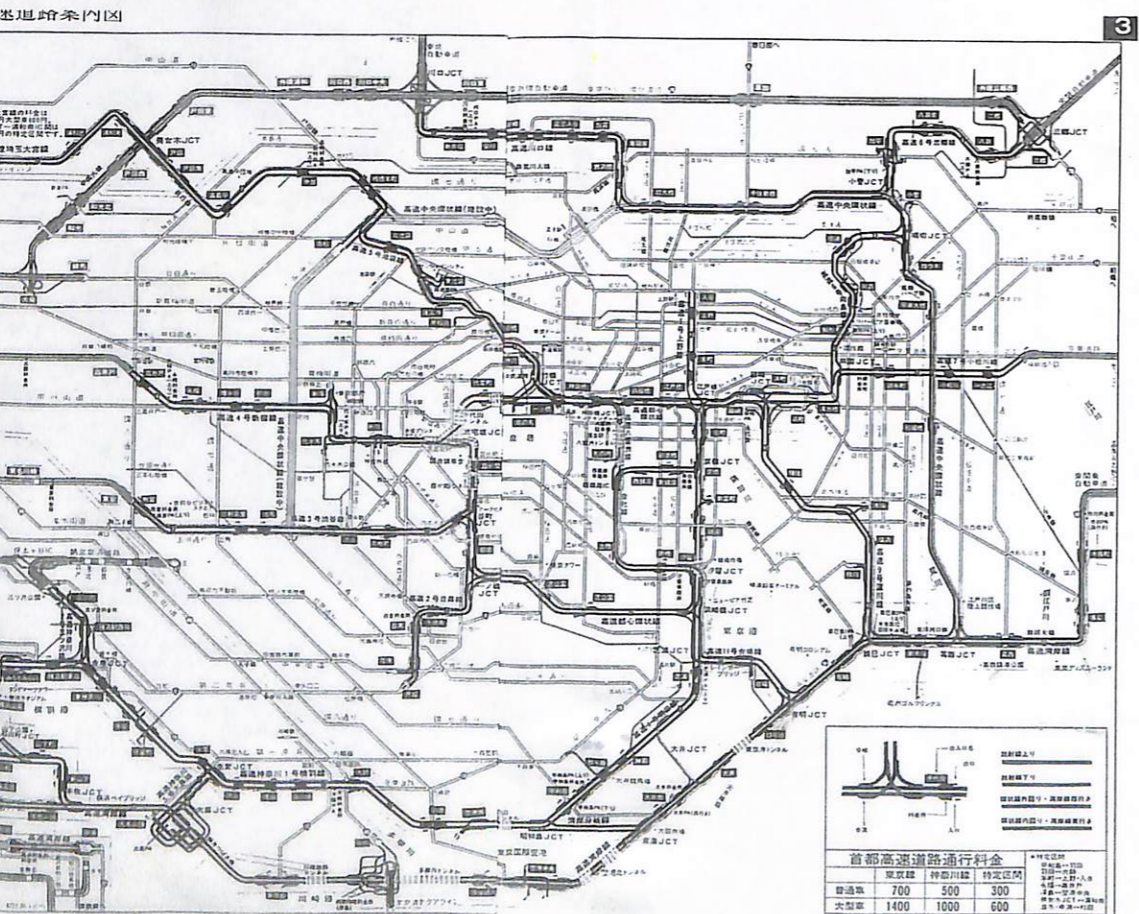
皆川=写真

緊急連絡用携帯番号 090-1856-2338(高沢)



〇築城年 天文二十三年(一五五四)  
 〇慶応三年の城主・牧野遠江守康清  
 〇石高 一万五千石  
 〇存廃城 廃城  
 〇所在地 長野県小諸市古城  
 天文二十三年(一五五四)以降、武田氏の領有する城であったが、天正十八年(一五九〇)豊臣配下の仙石秀久が城主となり、近世城郭として大改修を実施した。現存する大手門周辺の整備も実施され、大手門の解体修理も予定されている。

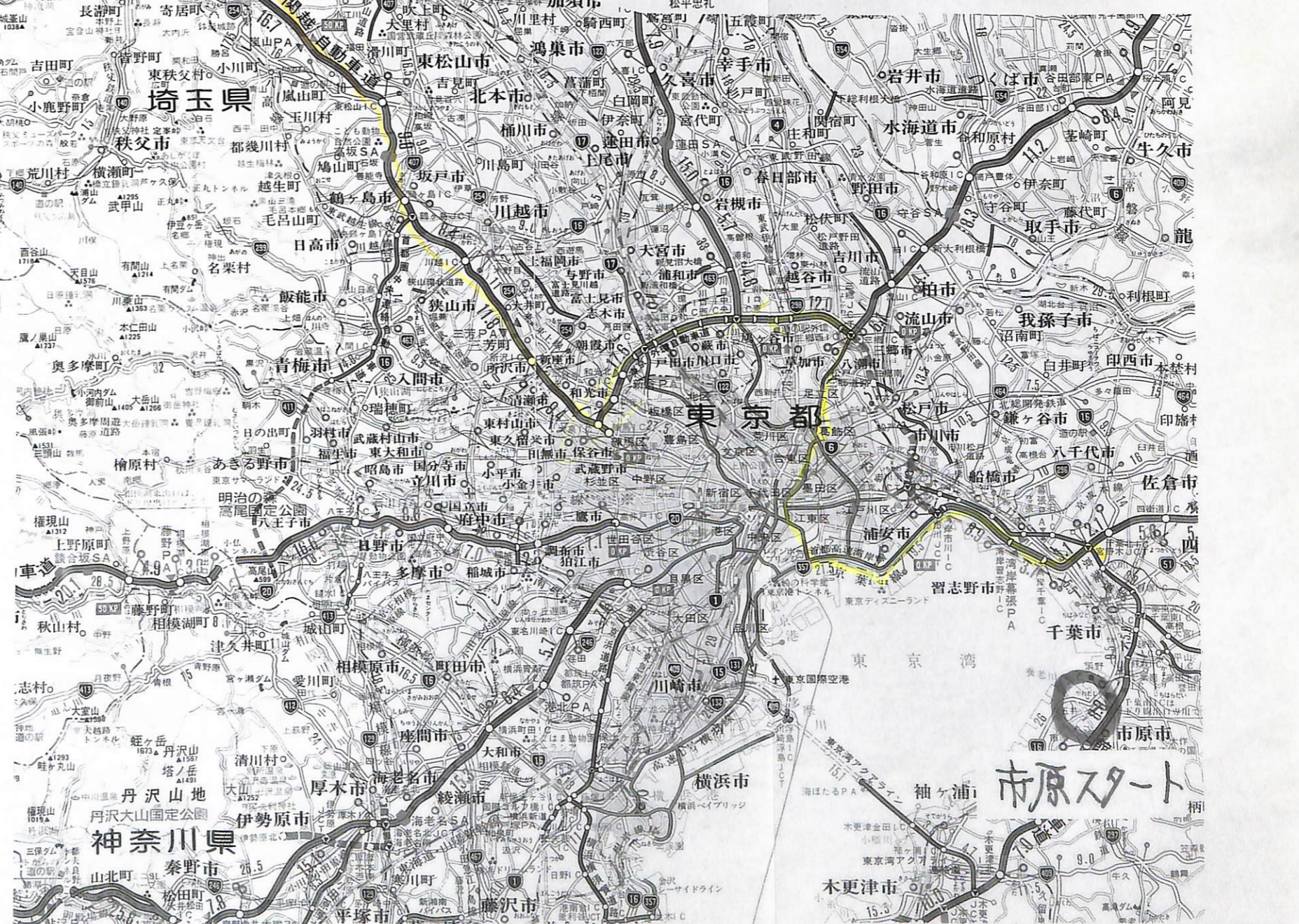
# 小諸城



松平忠礼

# 上田城

〇築城年 天正十一年(一五八三)  
 〇慶応三年の城主 松平伊賀守忠礼  
 〇石高 五万三千石  
 〇存廃城 存城  
 〇所在地 長野県上田市二の丸  
 天正十一年(一五八三)、真田昌幸により築城された。二度にわたる徳川軍の攻撃にも落城することなく、真田の名を天下に知らしめた。西隅櫓は現存、南・北隅櫓は、遊郭に転売されたが、原位置に戻された。平成六年には、本丸東虎口の櫓門が復元されている。

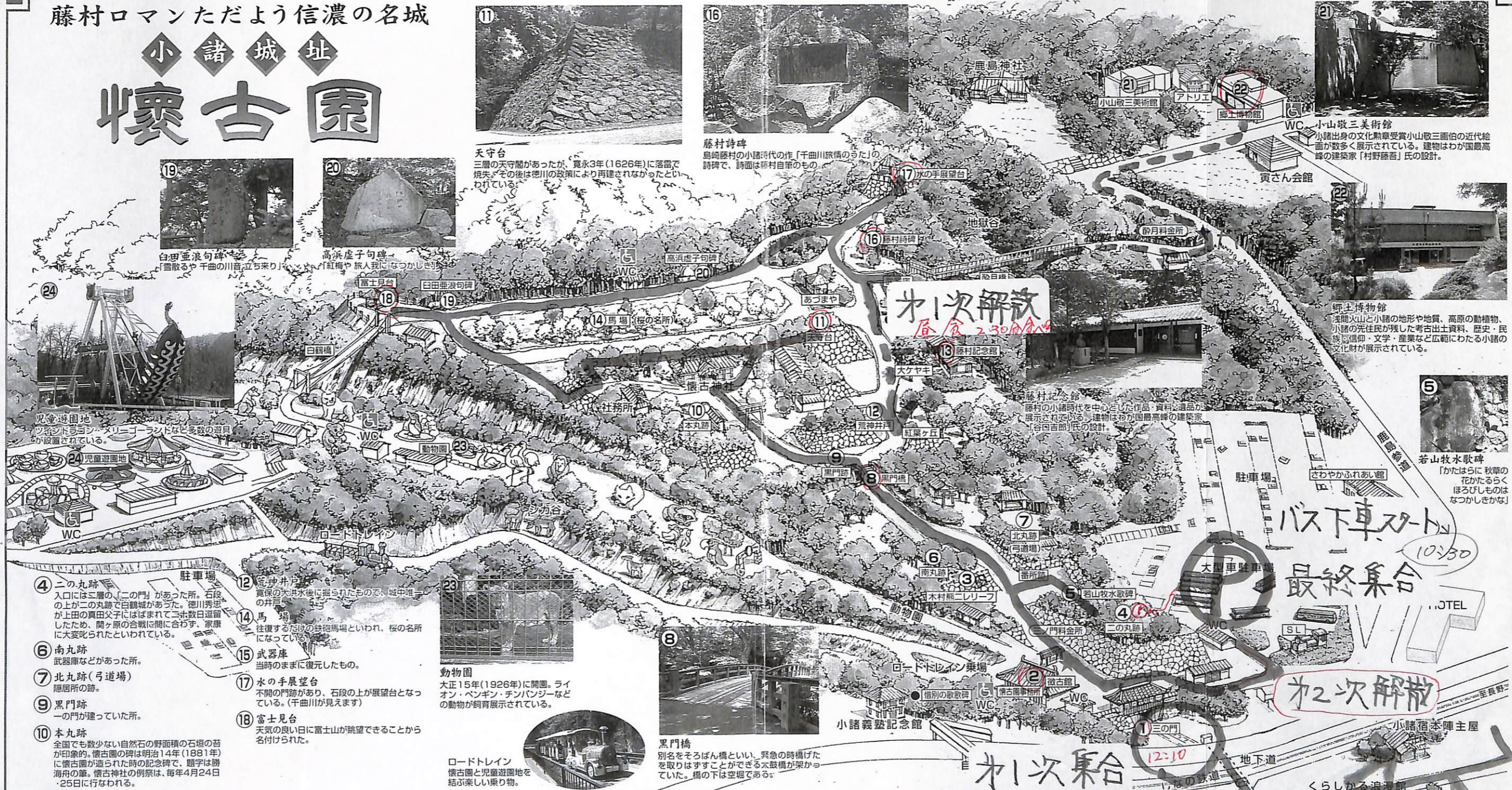


首都圏高速道路通行料金

車種	東京区間	神奈川区間	特定区間
普通車	700	500	300
大型車	1400	1000	600

# 藤村ロマンただよう信濃の名城

## 小諸城址 懐古園



- ④ 二の丸跡  
入口には三層の「二の門」があった所。石段の上が二の丸跡で白鶴城があった。徳川秀忠が上田の真田父子にはまかれて三浦日蓮留したため、関ヶ原の合戦に間に合わず、家康に大変叱られたといわれている。
- ⑥ 南丸跡  
武器庫などがあった所。
- ⑦ 北丸跡(弓道場)  
隠居所の跡。
- ⑨ 黒門跡  
一の門が建っていた所。
- ⑩ 本丸跡  
全国でも数少ない自然石の野面積みの石垣の苔が印象的。懐古園の碑は明治14年(1881年)に懐古園が造られた時の記念碑で、題字は勝海舟の筆。懐古神社の例祭は、毎年4月24日・25日に行なわれる。
- ⑫ 虎井戸  
寛保の大洪水後に掘られたもので、城下唯一の井戸。
- ⑭ 馬場  
往復する当時の鉄砲馬場といわれ、桜の名所になっている。
- ⑮ 武器庫  
当時のままに復元したのも。
- ⑰ 水の手展望台  
不開の門跡があり、石段の上が展望台となっている。(千曲川が見えます)
- ⑱ 富士見台  
天気の良い日に富士山が眺望できることから名付けられた。

**動物園**  
大正15年(1926年)に開園。ライオン・ペンギン・チンパンジーなどの動物が飼育展示されている。

**黒門橋**  
別名をそるばん橋といい、緊急の時橋げたを取りはずすことができる天鼓橋が架かっていた。橋の下は空堀である。

**道路トレイン**  
懐古園と児童遊園地を結ぶ楽しい乗り物。

### 歴史が彩る古城のロマン。ここにはゆるやかな時が流れています。

小諸城の起りは、平安時代から鎌倉時代にかけて「源平盛衰記」や「平家物語」に登場する小室太郎光兼(木曾義仲の部将)が、現城址の東側に館を築いた。またその後、大井光忠が小室氏の勢力をおさえて鍋蓋城を築きその子光為がさらに出城として乙女坂城、別名白鶴城(二の丸跡)を構えたが、武田信玄の攻略により落城。信玄はこの地が重要であることから山本勘助と馬場美濃守信房に命じて築城したのが、現在の小諸城址で「酔月城」ともいわれている。

その後、織田信長の将滝川一益、徳川家康の将松平源十郎康国が城主になった。さらにその後、仙石秀久が城主となって二の丸・黒門・大手門を建て、その子忠政が三の門・足柄門を建て現在の小諸城が完成した。その後、城主は徳川・松平氏など六氏に変わり、元禄15年(1702年)、牧野氏になり十代続いた。

この城の特徴は、全国的にも珍しい城下町より低い穴城で、浅間山の火山灰でできているため、水を用いず、崩れやすい断崖が堅固な要塞となっている。

明治4年(1871年)の廃藩置県で役割を終え、明治13年(1880年)に神社を祀り、懐古園と呼ぶようになった。



**木村熊二レリーフ**  
小諸義塾の塾長、1695年の父木村熊二先生と旧小諸義塾の記念に、門弟並有志、島崎藤村書「昭和11年」と刻まれている。



**懐古館**  
お城ゆかりの武具や古文書が陳列されている。



**三の門**  
寄棟造りの二層の城門で、元和元年(1615年)に創建。寛保2年(1742年)の大洪水で流失し、明和二年(1765年)に再建。両側に矢狭間・鉄砲狭間が付けられた戦国式な建物で正面にある「懐古園」の大額は徳川家運の筆。国指定重要文化財。

AM.

PM 12:40 →

バス集合 13:20発

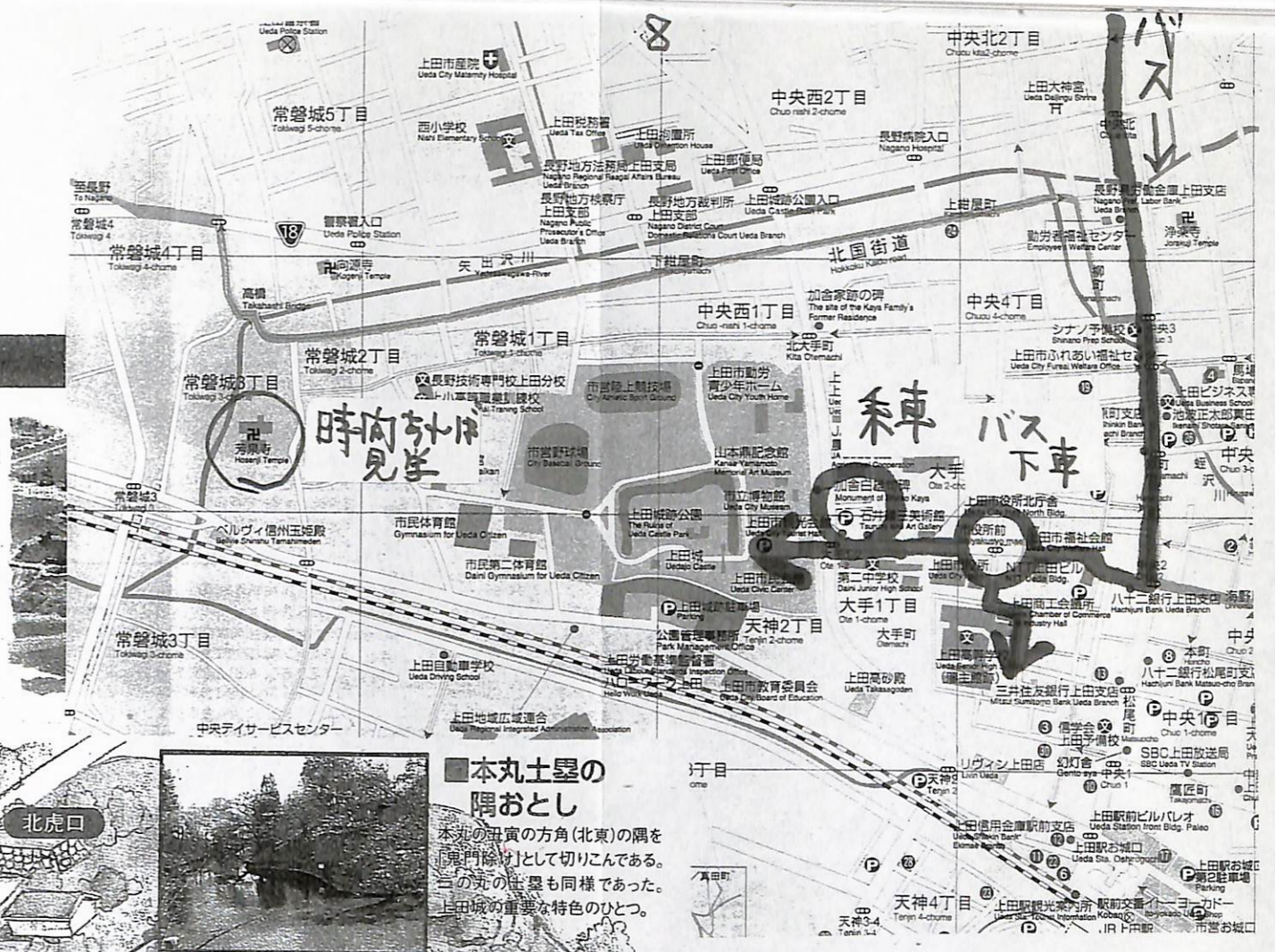
■無断複製・転写を禁じます。

四百有余年の歴史が語りかけてくる

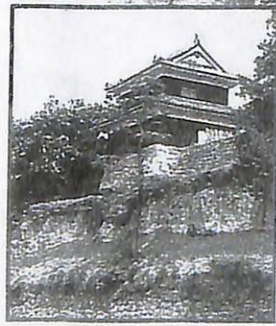
# 上田城

## 上田城(国の指定史跡)

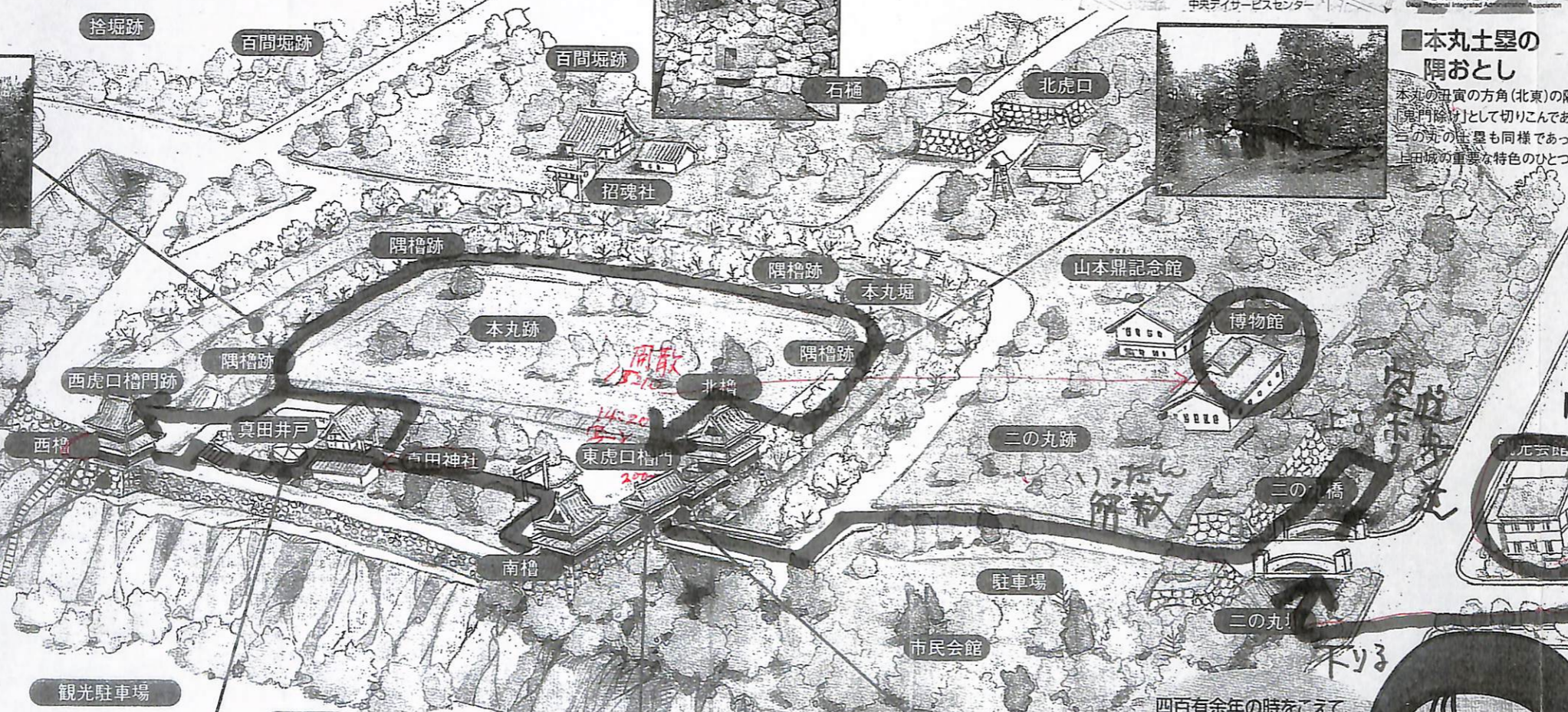
上田城は、天正11年(1583)真田昌幸公が築城、平城で二度にわたって徳川の軍が攻め落とせなかった戦国の名城です。大坂の陣のあと城主真田信之公が松代に移封の後、仙石氏が小諸から移り城を大改修、さらに近世後半には松平氏の居城となりました。今は本丸・二の丸にあたる所が城跡として公園になっており、隅櫓や石垣・土塁が残っています。櫓は仙石忠政公が築いたもので、かつては櫓門2基、隅櫓7基がありました。明治期に民間に売られ、今は隅櫓が本丸入口の両側と南西の隅に一つの3基のみ。とはいえ、三の丸が現商工会議所付近までという、広さと共に尼ヶ淵からそびえたつ姿はまさに上田城の象徴で、400有余年の歴史を語りかけてくれます。



**堀と土塁(土居)**  
上田城の堀は、ほとんどが素掘りのままであり、また掘上げた土で土塁を築いている。



**西櫓**  
尼ヶ淵にのぞむ段丘の上に立つ上田城本丸隅櫓。壁の下部は板ばり(下見板)になっているが、これは初期城郭建築の様式。寒冷地に多く見られる形式でもある。窓は突き上げ戸の「武者窓」。射撃用の小窓「矢狭間・鉄砲狭間」も設けられている。



**真田井戸**  
城内唯一の大井戸でもあった。この井戸からは抜け穴があって、城の北方、太郎山麓に通じていたとの伝説もある。

**尼ヶ淵**  
当時はここに千曲川の流れがあり天然の要害となっていて、上田城は別名「尼ヶ淵城」と呼ばれていた。



**真田石**  
城内一の大石(長径3m)。真田信之公の松代移封のとき持ち去ろうとしたが、不動であったとの伝説をもつ。この真田石を始めとして、上田城の石垣の石材の大部分は市街地北方、太郎山産の緑色凝灰岩。

**本丸土塁の隅おとし**  
本丸の丑寅の方角(北東)の隅を「隅門除け」として切りこんである。三の丸の土塁も同様であった。上田城の重要な特色のひとつ。



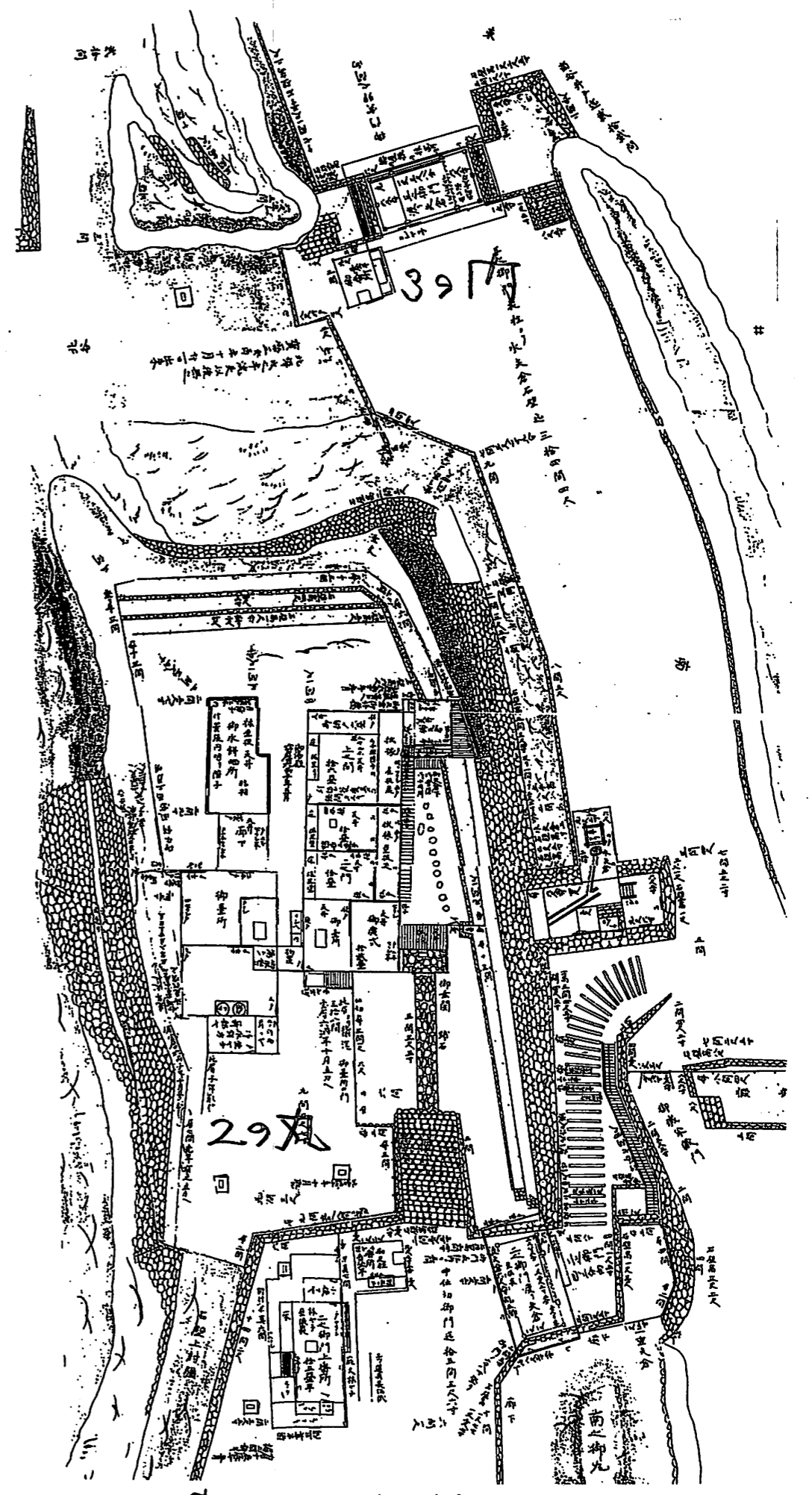
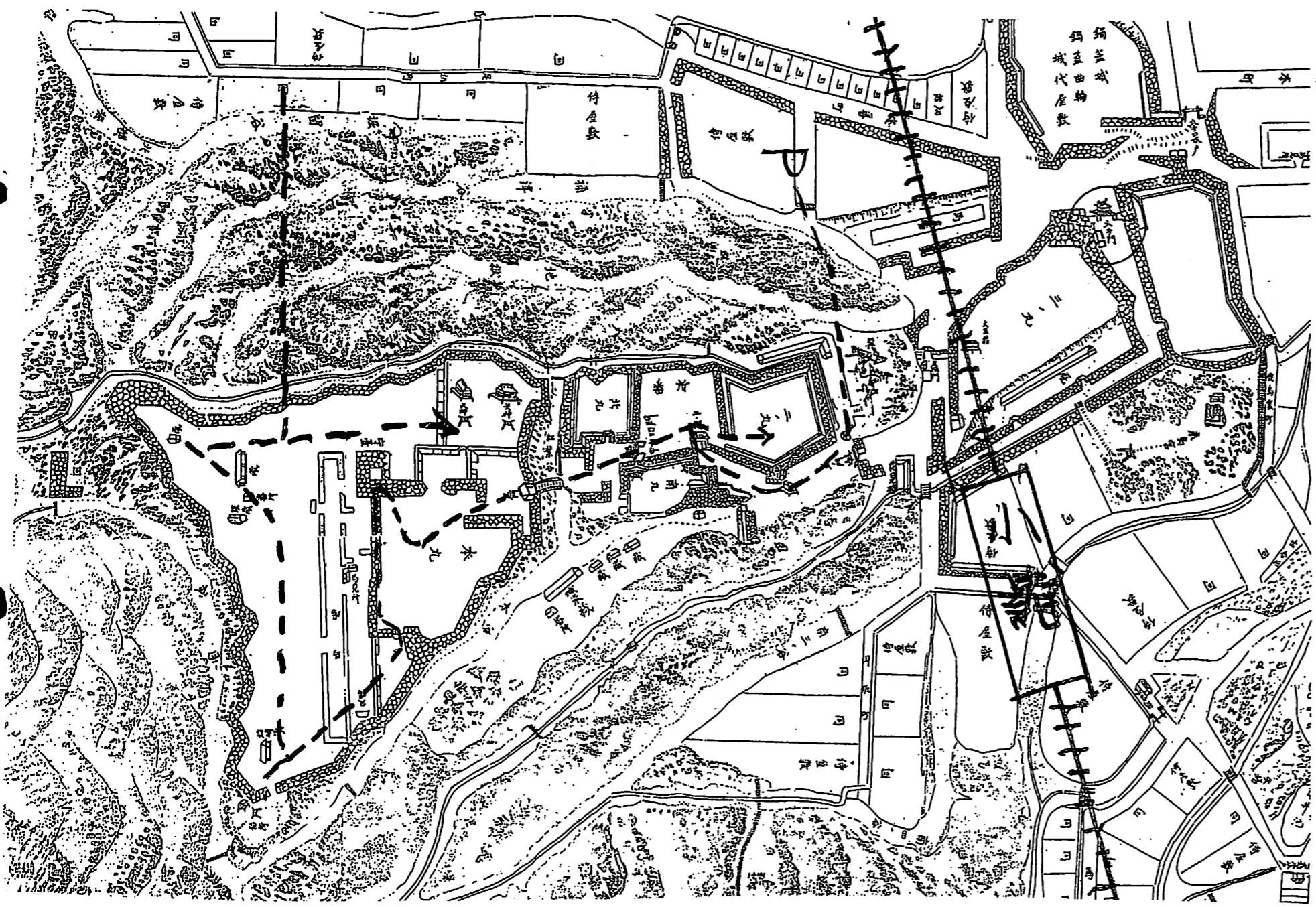
上田高校  
領主館跡が

四百有余年の時をこえて、真田氏の栄光の時代をしのぼせる上田城を、ゆっくりと歩いてみませんか。



# 小幡城絵図

江戸復興期



39内 ~ 29丸 絵図

# 小諸城大手内

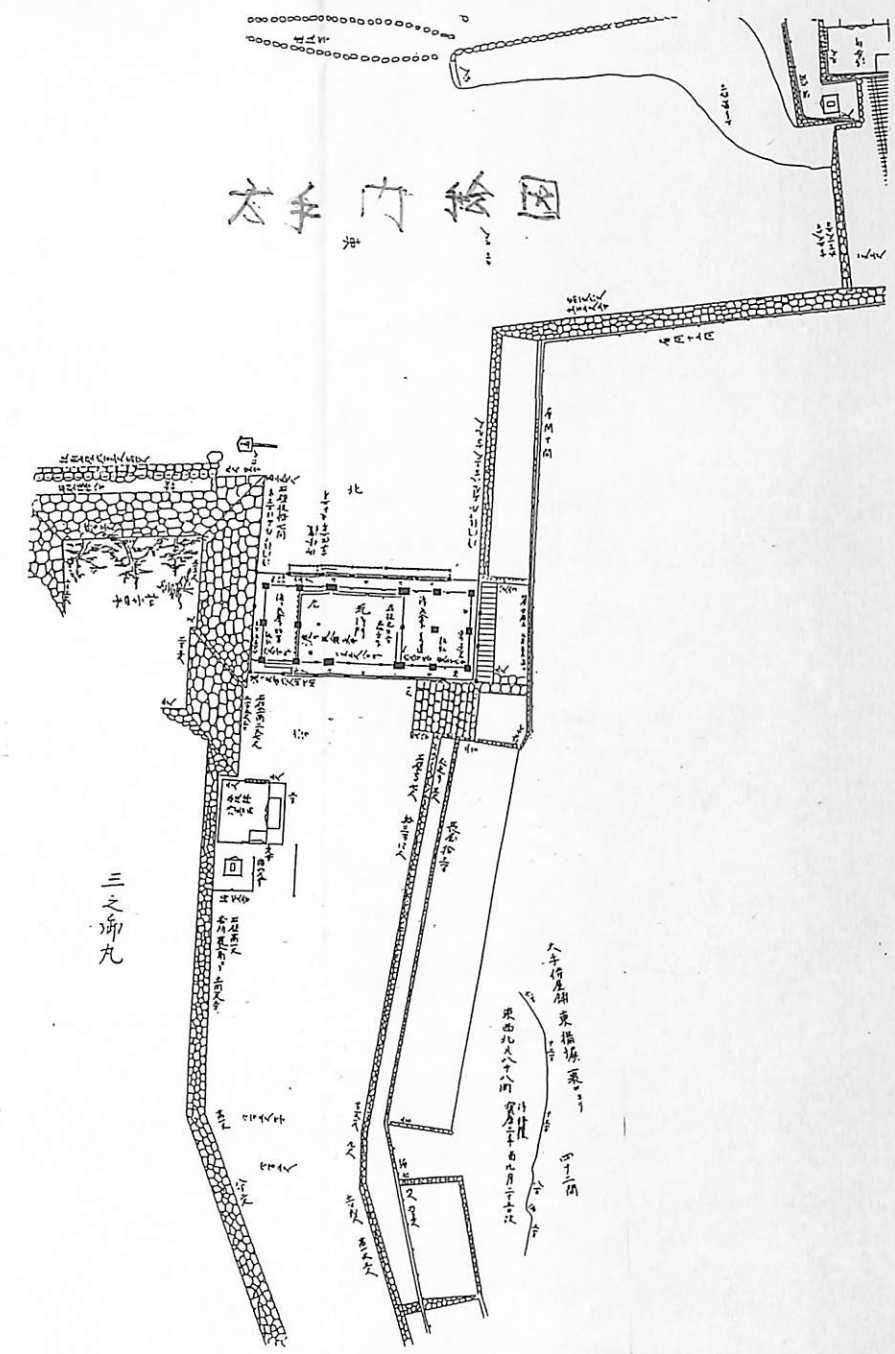


実例

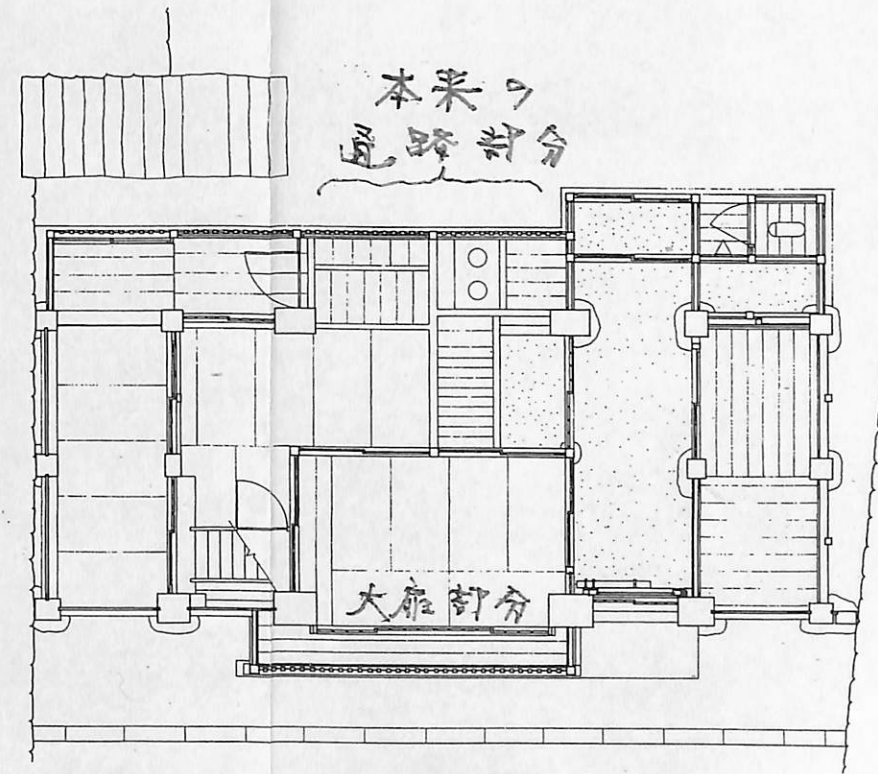


実例

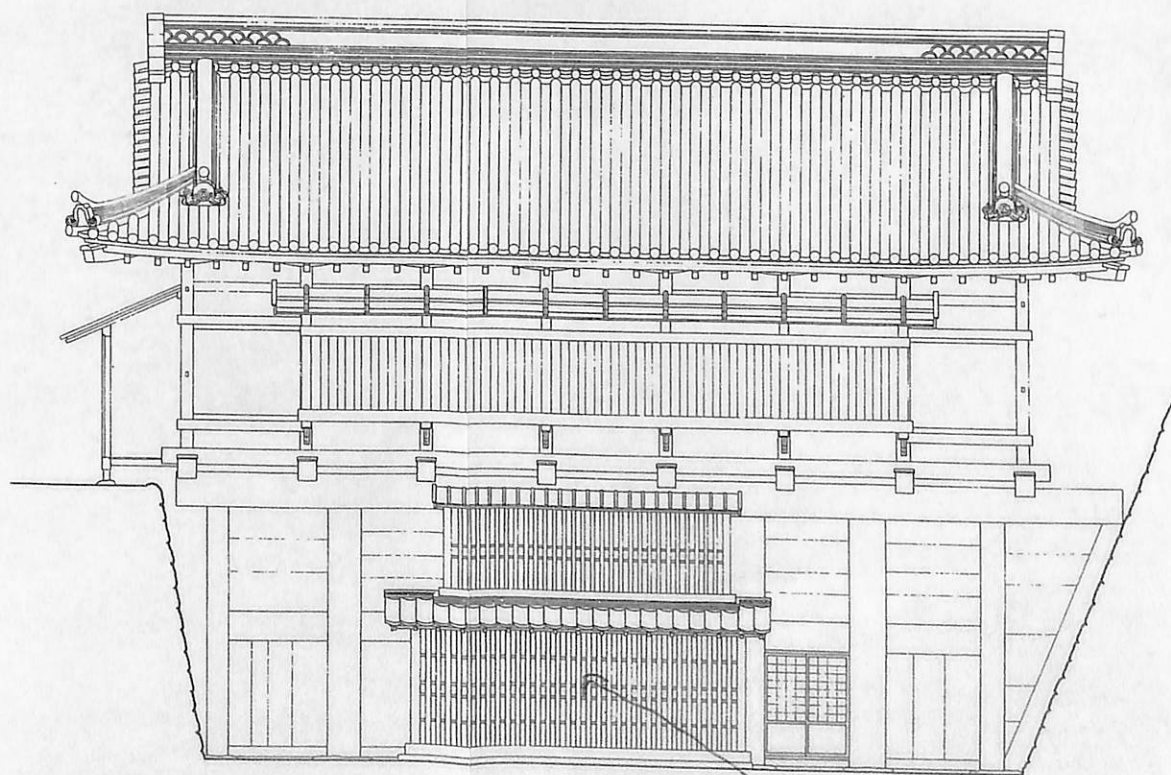
## 大手内絵図



三之御丸



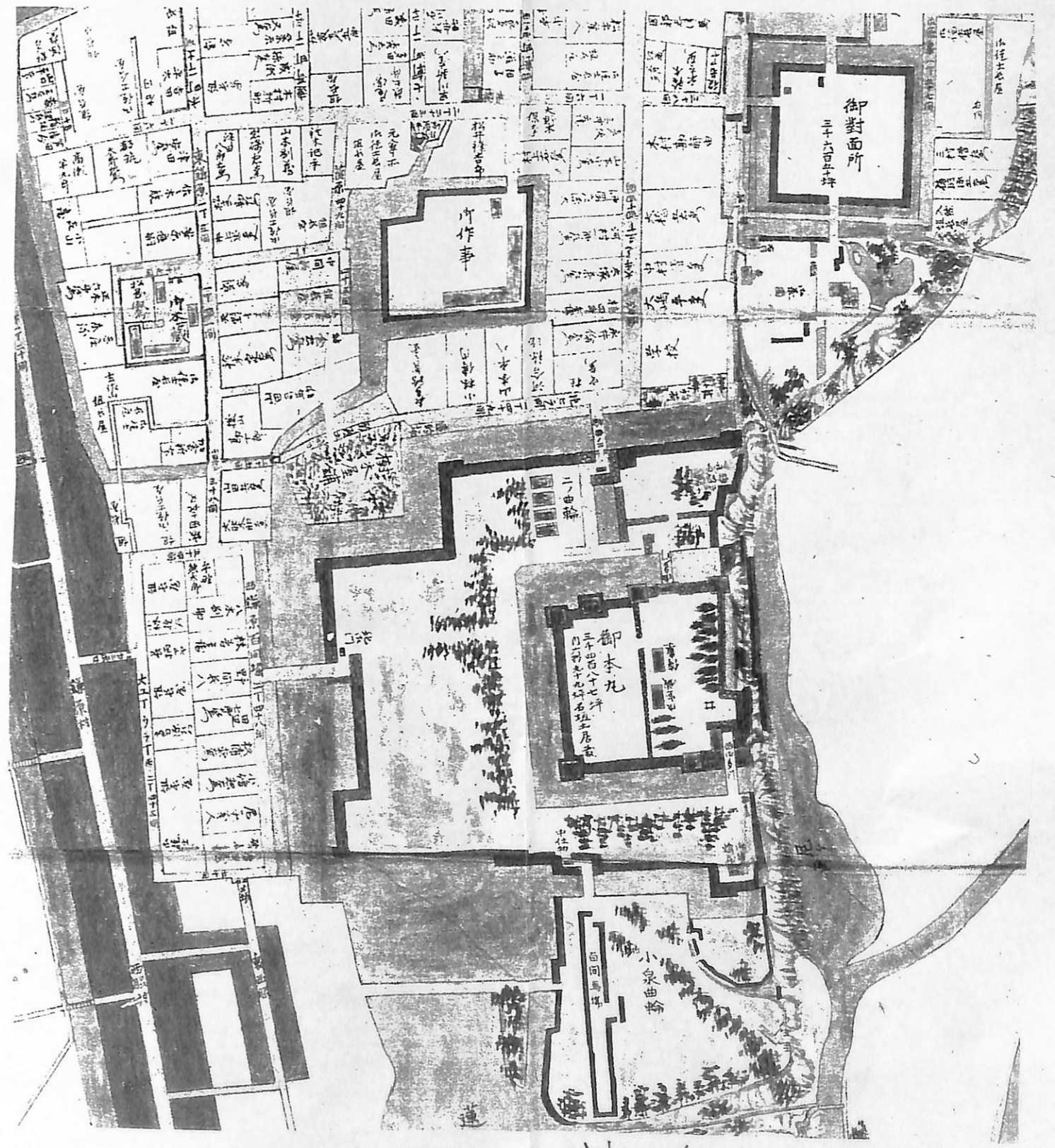
平面図



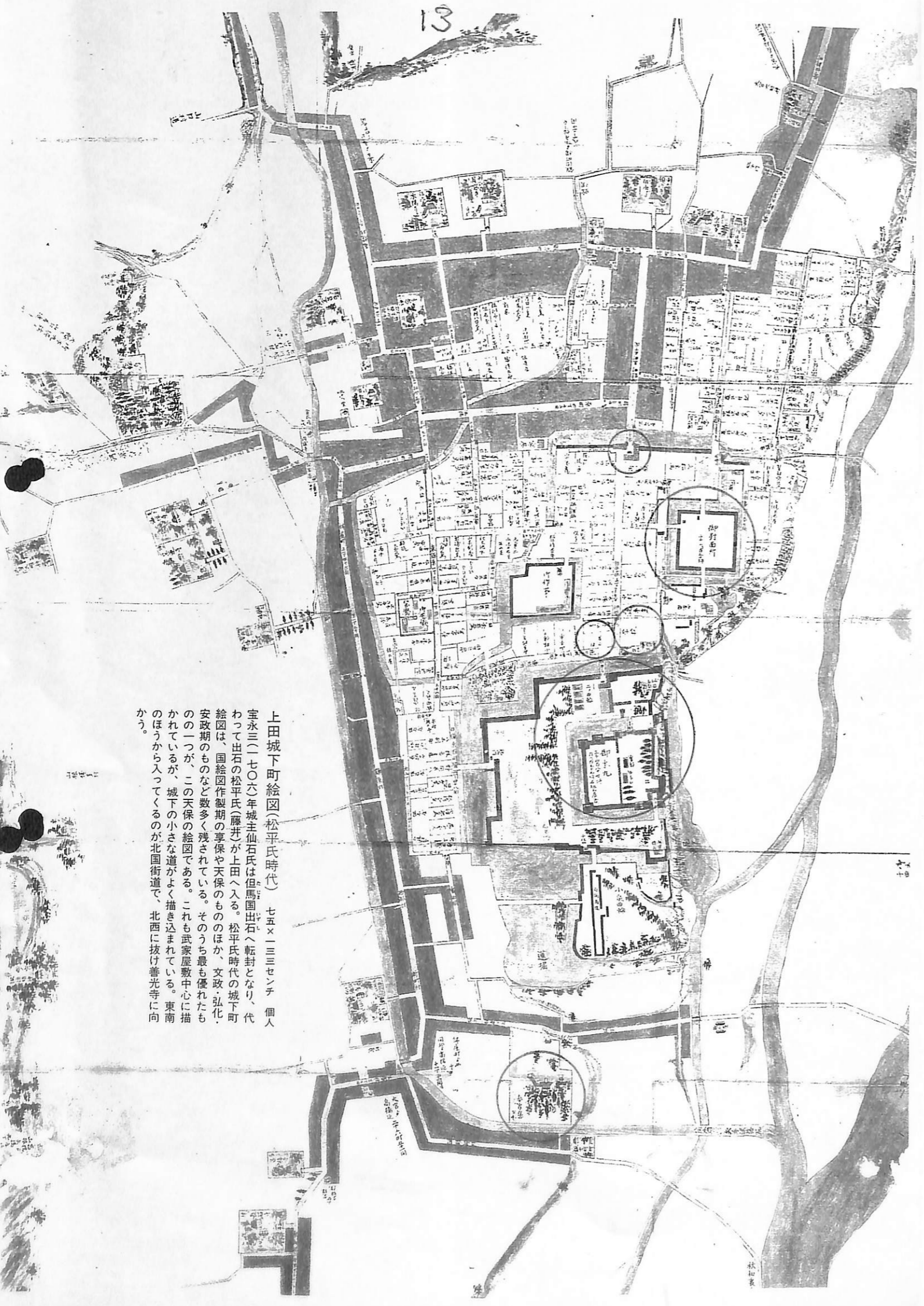
正面図 本座大座敷部分

五間櫓門、入母屋造、本瓦葺  
一階の部  
桁行 正面五間 背面五間 (三八・九〇尺)  
梁行 二間 (二四・六二尺)  
礎石 礎石・狭間石、地覆石、花崗岩自然石据付。  
正面 鏡柱、脇柱、隅柱、添柱、冠木、櫓、戸当り。大扉縦框、上  
下框、中棧、縦板張り、扉釣込み。  
脇間 櫓、櫓上横板嵌、櫓下潜戸片開き、縦框、上・下框、中棧、  
縦板張り、扉釣込み。  
原金具 隅金具、八双金具、凹金具、肘金具。  
内部両側面 地覆、腰貫、内法貫、頭貫、漆喰壁。  
西番所 正面から西側脇柱通り番所中央柱を振分けに北側一間真壁、  
南側一間腰貫と内法貫間格子取付。西面間柱建て真壁中塗  
仕上げ。北面横板嵌め、南面方立、西半間真壁中塗仕上げ、  
東半間出入口板戸引込み、床板張り。  
東番所 正面から東側脇柱通り番所中央柱を振分けに北一間板戸二本  
引違。南一間腰貫と内法貫間格子取付。東面各間横棧、  
縦板張り。北面横板嵌め、南面も同様横板嵌め、床板張り。  
(西番所北面に櫓の痕跡が残るが現在は室内部分を欠き、貫を  
通し、下部は縦板張りとなっている。)

正面鏡柱桁筋に冠木、背面柱桁筋に大梁を架け、梁間に角材の横  
梁八本を架構して、桁行中央に小梁を通し、同小梁と平行に根太を各間  
五本宛を配す。棧梁木口を五分板で体載よく包む。  
二階の部  
桁行 七間 四二・〇〇尺  
梁行 三間 一九・五〇尺  
中央七間渡櫓。角柱総面取り、柱踏(階土色)、足元貫、内法貫、頭  
貫、胴差。柱と小屋梁及び妻梁折置組。軒桁、妻桁。小屋組棟真通り棟  
束一間ごとに配し、真束を振分け半間に小屋束立て、棟木、母屋を受け、  
小屋貫二段で上棟に組固め、野垂木、野地小間返。軒化粧垂木は梁上端  
に垂木掛を一筋配し、垂木尻込桎止め。茅負、裏甲、軒天井は木舞、縦  
板張り、垂木間面戸。結木は隅・平結木を用い、軒を支える。  
二階床構造 棧梁と根太上端を同高に納め、床板を張る。  
二階天井 廻縁を四周に廻し、棧縁類面十一本を削付け天井板を張  
る。内法長押、天井長押、敷居、鴨居、寄せ、無目敷・鴨居。二階東か  
ら第五柱通りを間仕切って二室とする。間仕切中央柱建て、南・北各間  
戸換二本引違い。東面中央一間縦舞良二本引違い、両端間真壁中塗り。  
西面各間真壁中塗り仕上げ。南面は両端間真壁中塗り仕上げ。東から第  
二・三・四・五・六各間、敷・鴨居、板戸二本引違い、内明障子一本。  
北面出格子窓五間、持送腕木、方立柱、下框、中敷居、軒桁、側板を嵌  
め組固め、縫破風、猿頭、屋根板一枚段葺、格子各間六本宛、内側明障  
子二本引違い、床板張り。  
妻飾り、木連格子、前包、破風板、登臺甲、梅鉢懸魚、六葉、菊座、  
樽杓。  
屋根 入母屋造、大棟両端鬼板飾付、蟻で飾る。肌貫斗二段、面戸、  
葺瓦、熨斗二段、熨斗三段、青海波瓦一段、熨斗三段、雁振瓦、隅棟、  
肌貫斗一段、割熨斗二段、熨斗一段、雁振瓦、鳥金瓦、鬼納め、降棟、  
肌貫斗一段、割熨斗二段、雁振瓦、鳥金瓦、鬼瓦納め。



上田城図



上田城下町絵図(松平氏時代) 七五×一三三センチ 個人  
 宝永三(一七〇六)年城主仙石氏は但馬国出石へ転封となり、代  
 わって出石の松平氏(藤井)が上田へ入る。松平氏時代の城下町  
 絵図は、国絵図作製期の享保や天保のものほか、文政、弘化、  
 安政期のものなど数多く残されている。そのうち最も優れたも  
 のの一つが、この天保の絵図である。これも武家屋敷中心に描  
 かれていたが、城下の小さな道がよく描き込まれている。東南  
 のほうから入ってくるのが北国街道で、北西に抜け善光寺に向  
 かう。

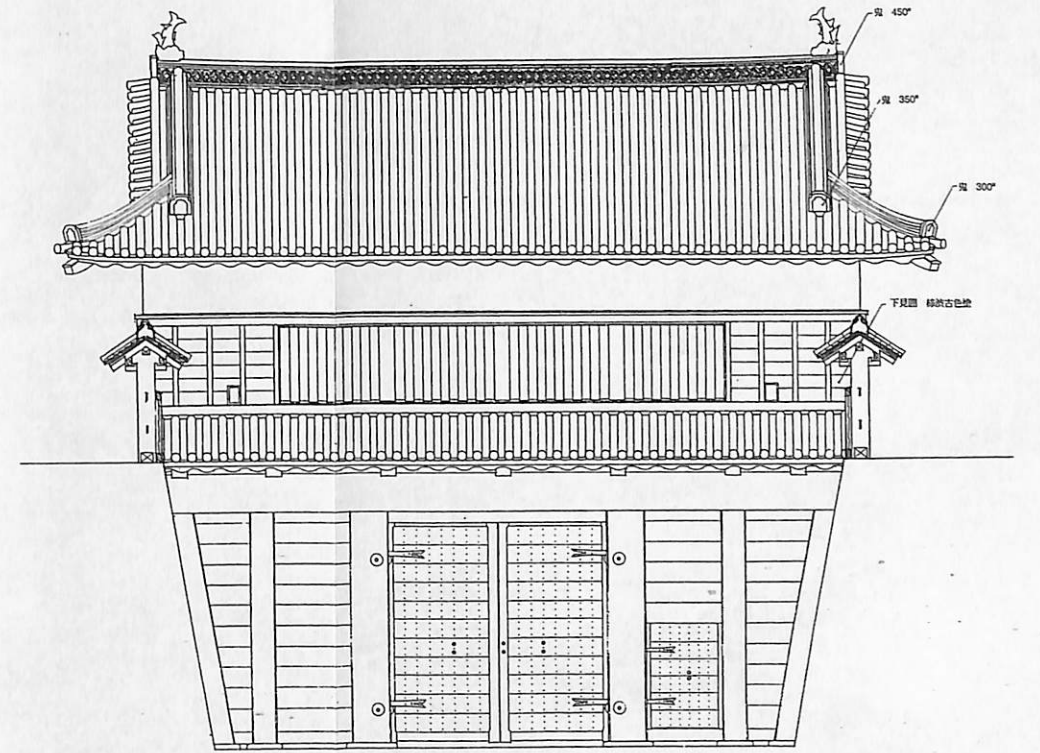
15



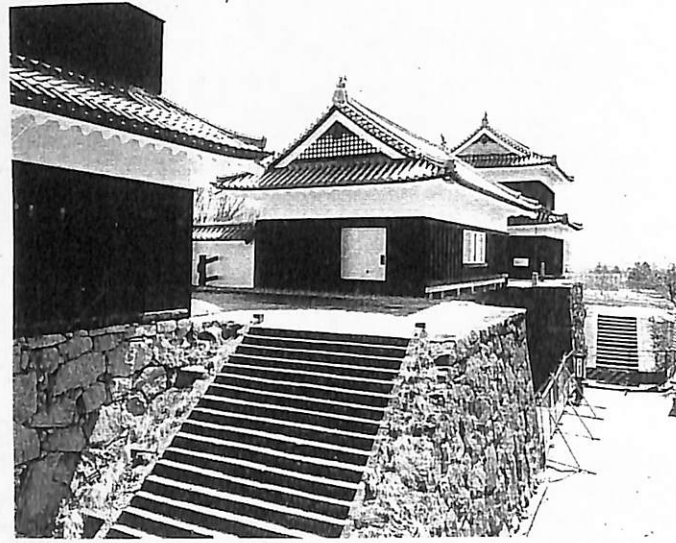
東虎口櫓門と  
北櫓(右)・南櫓(左)  
北櫓と南櫓は、廃城によって民間に  
払い下げられると、妓楼として再利  
用されるという数奇な運命をたどっ  
た。上田城には、合計7基の櫓が  
あったものの、当時の名称は不明で、  
方位による名称は、戦後に再移転さ  
れたのちにつけられた。  
写真/世界文化フォト

# 上田城東虎口

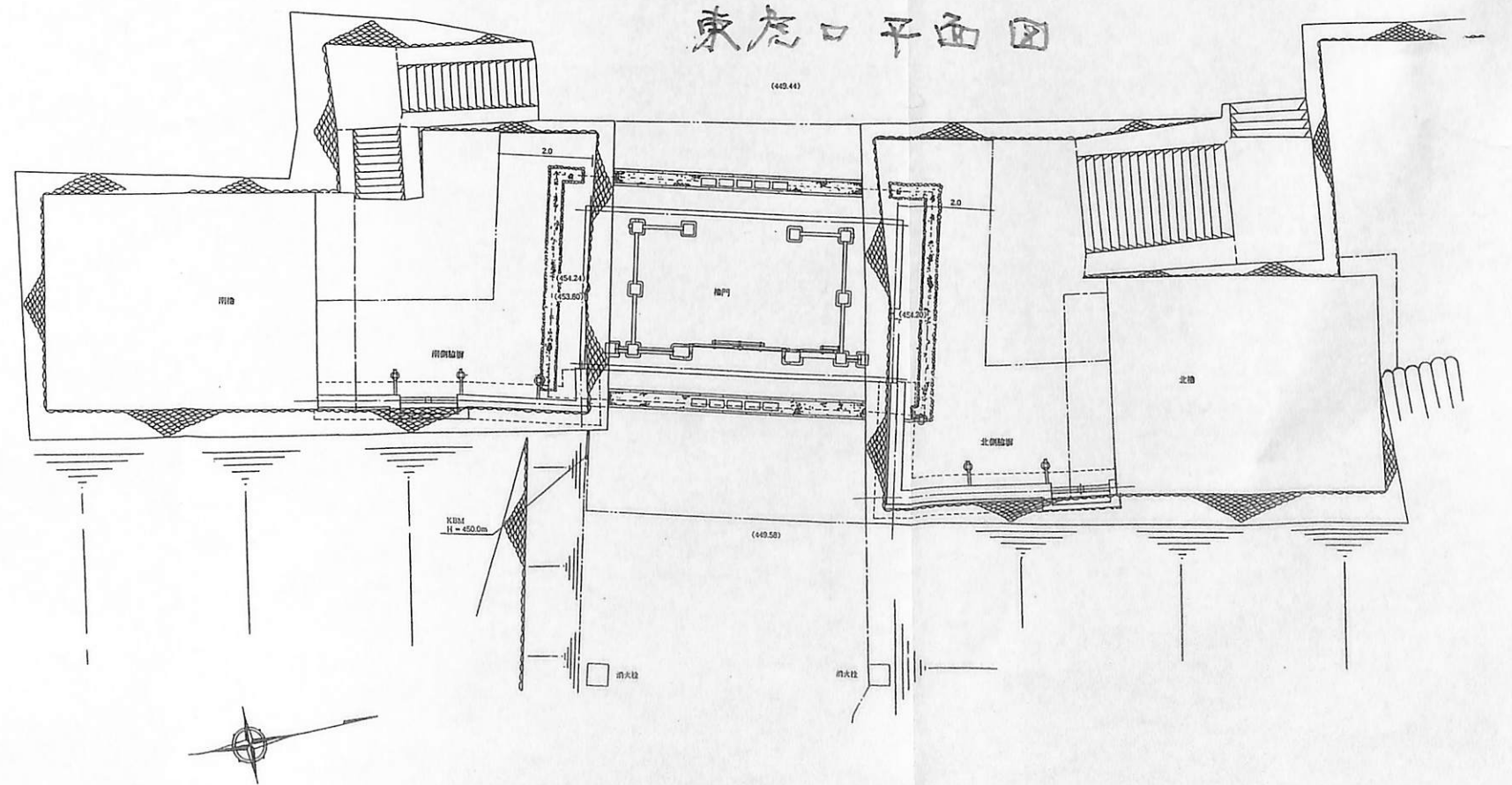
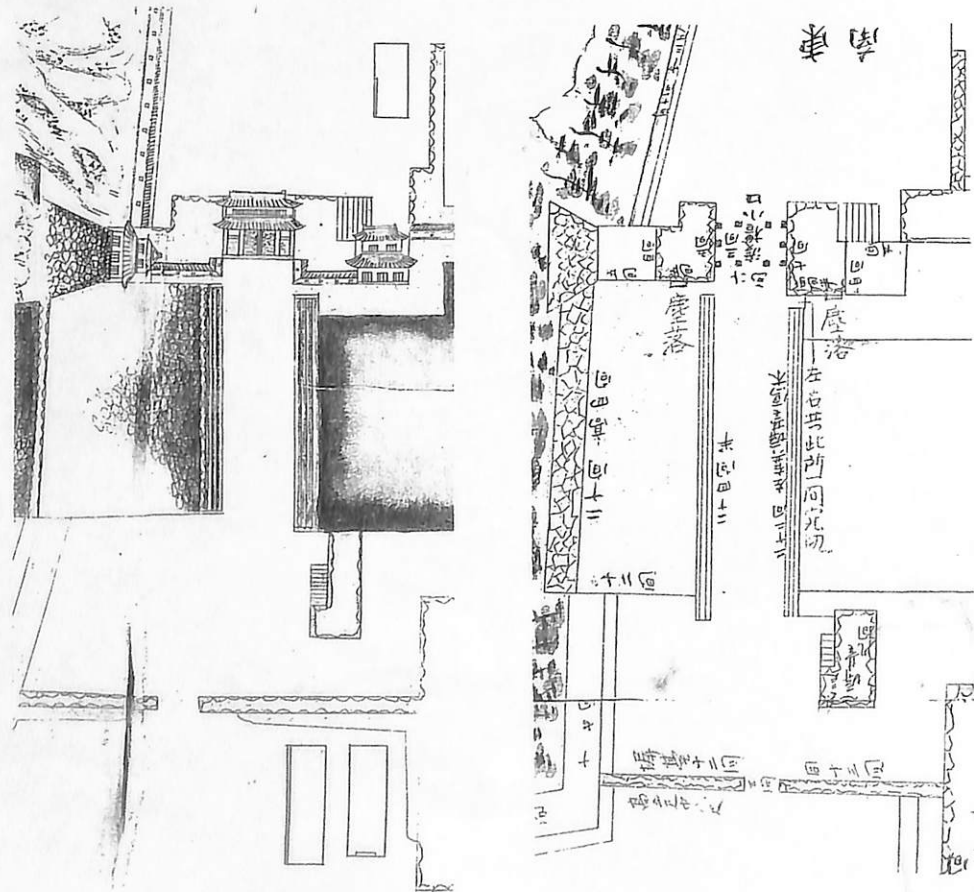
16



## 櫓門正面図



## 明治の古写真



## 東虎口平面図



城と史跡を歩く会\*第35回(最終回)

「信濃路の小諸城と上田城を歩く バスツアー」

<日時> 平成16年10月23日(土曜日=予備日なし)

<主要行程> 五井駅東口5時45分、八幡公民館6時00分、蘇我駅西口15分(15分前集合)
往路=湾岸、首都高、関越自動車道、上信越自動車道、小諸IC
小諸城=懐古園、3の門、本丸跡、天守台、水曲輪展望台、藤村記念館、本陣、大手門
上田城=お館跡、2の丸、東虎口櫓門、真田神社、本丸跡、上田博物館
復路=上田IC、往路を逆走、出発地20時30分ころ着(予定)

ご案内 山岸弘明

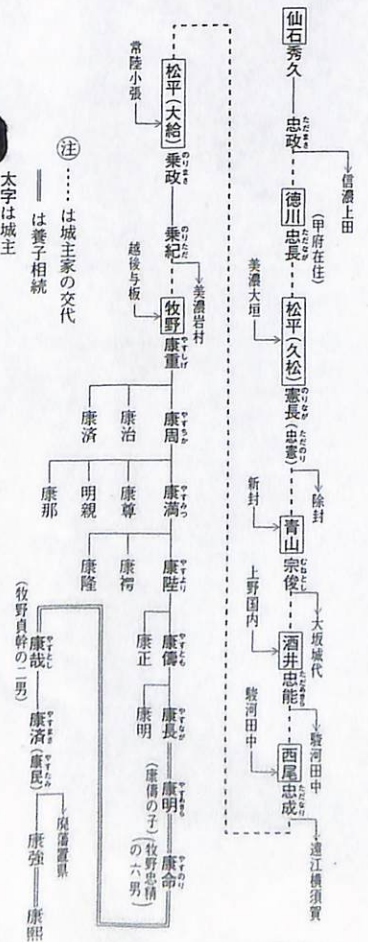
小諸城

藤村の「古城のほとり」が似合う名城

1) 小諸城(懐古園) = その歴史と概要

- ① 15世紀長享年間、小諸の土豪大井氏築城という。戦国時代の天文23年(1554)武田信玄が攻略、一族の武田信豊がここに拠った。
② 西南に千曲川、北西に中沢川、東南に蛇堀川を控えた丘陵に立地した天然の要害。
③ 明治6年の存廃令により廃城となるが、明治13年城址の荒廃を惜しんだ旧士族会が3の門以内を城址公園=懐古園として保存、本丸跡地に牧野氏歴代藩主を祀る懐古神社を建立した。
④ 史跡指定ない城址公園。士族会は市などの指定を拒否続けているという。
⑤ 明治を代表する詩人・島崎藤村が小諸義塾教師として小諸に招かれ、大手門2階などを教場とした。

小諸城主系図



小諸城址 懐古園

3の門

2) 3の門(懐古神社外殿)

- ① 4つの城門、本丸から3つめの門、天正19年仙石氏構築、寛保2年洪水で流失、明和年間再建。江戸後期図(別掲)は屋根入母屋造りを記し、明治以後に変更されたことがわかる。
② 2階造り。現況櫓門。真壁造り。屋根寄棟造り。檼瓦葺き、しゃち
③ 門内左隅に門番所。緊急時は左右のがんき坂から2階へ。
④ 両脇石垣、袖塀、鉄砲、弓狭間
⑤ 昼食解散後の集合場所。表側は午後に見学。

3) 懐古園3の門料金所(団体入場)

- ① 入園券は懐古園(城址公園)、徴古館、藤村記念館、郷土博物館共通券です。紛失しないよう最後まで持参ください。
② 入園直後に左右分かれ道、右は本丸方向、左は動物園(蔵地跡)。右手2の丸石垣に沿って上り坂を。

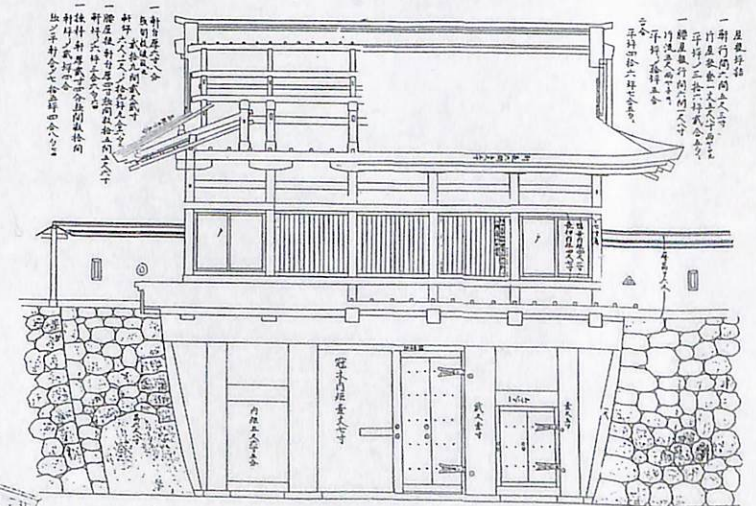
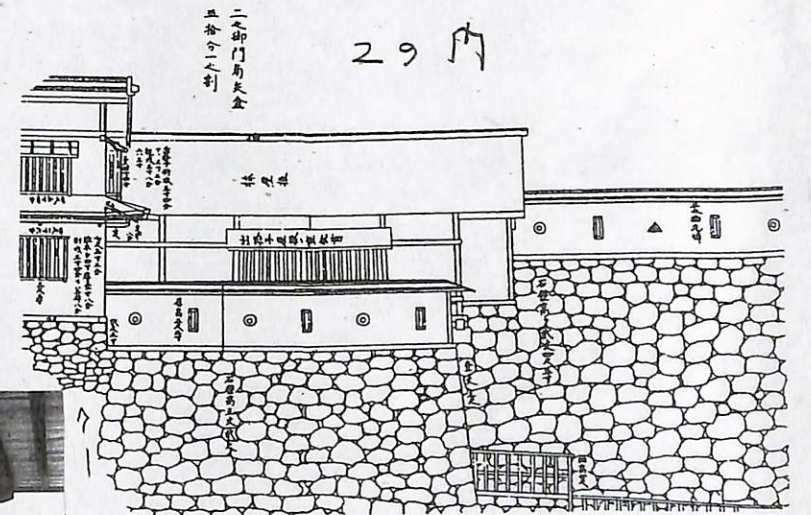
4) 2の門と2の丸

- ① 2の門は2の丸正門。添付図面をみると2階造り、渡櫓門形式。両側石垣に載せた2階部分は6尺5寸間5間、1階は3間1戸、中央の通路部分は1丈2尺2寸5分の大戸になっている。
② 右手小高い丘は2の丸。武田氏当時の本丸。仙石氏時代の慶長5年、関が原をめざす徳川軍本隊を率いた徳川秀忠が上田城を攻略した時の本陣。秀忠軍は真田氏攻略に手間取り、関が原の合戦に遅刻、家康の激怒を買った。
③ 慶長18年、仙石氏が小諸城と小諸城下を大拡張。新たに本丸を築いたことで2の丸になった。
④ 江戸後期とみられる2の丸周辺図。上の間、2の間など。

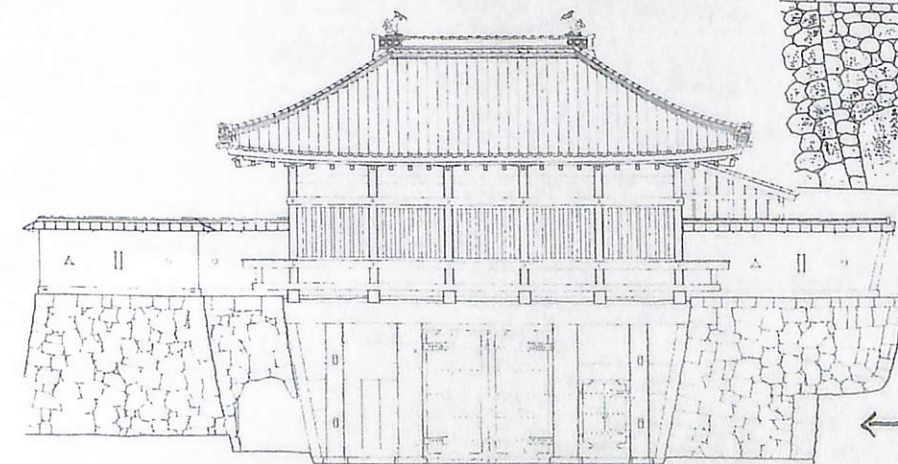


3の門正面

3の門内側 3の門2階



江戸後期3の門拾図



←現在3の門正面図



- 1 2) 3の門前集合 (午後のスタート)
  - ① 3の門を今度は表側から見学、「懐古園」額は徳川宗家16代家達の書
  - ② しの鉄道小諸駅と線路敷は旧城内3の丸、かつて藩校、会所、武家地など。明治21年、旧国鉄信越線(当時直江津線)敷設のため城内に駅地を提供した。
  - ③ 午後は連絡通路を通過して駅反対側、大手門と北国街道を回る。
- 1 3) 旧北国街道
  - ① 北国街道は5街道の北陸道と中山道を結ぶ脇往還の1つ。越後直江津から高田をへて信濃に入り、上田、小諸から信濃追分に通じた。
  - ② 小諸宿は参勤交代、善光寺詣などの街道要衝として発展した。
- 1 4) 本陣問屋 (といや=国の重要文化財)、脇本陣
  - ① 本陣は参勤交代の諸大名や公務で出張する公家や旗本たちのために作られた公立の宿泊、休息施設、問屋は宿駅の人馬継ぎ立て、官営荷役施設。小諸宿では両設備が兼帯された。
  - ② 本陣主屋は駅前に移転(後出)、問屋部分が現存、江戸後期寛政、文化期の建築で、主要街道に残る数少ない本陣建築として国の重要文化財に指定されている。
  - ③ 脇本陣

- 1 5) 大手門 (国の重要文化財)
  - ① 慶長19年仙石氏築造の小諸城正門。江戸初期の城門様式を残す。東日本最大の現存大手門。
  - ② 独立型2階造り、櫓門。屋根入母屋造り、本瓦葺き、シャチ
  - ③ 1階は桁行(間口)5間1戸、梁行(奥行)2間、鏡柱、脇柱、隅柱、添柱。本来は中央が通路で大御門、左右に脇門、両端1間が番所、明治維新後競売、払い下げられ改造。現在は中央通路を閉鎖して部屋として使用、通行は脇門を通り抜ける。補修工事中。
  - ④ 2階は桁行7間、梁行3間。
- 1 6) 本陣主屋 (時間あればいったん解散、自由見学)
  - ① 先ほど見学した本陣問屋にあった。明治維新後佐久市の桃源院本堂、庫裡として使われたが、平成7年小諸市に寄贈されたことを受けて旧地にほど近い現在地に復元した。
  - ② 切妻造り、瓦屋根、むくり屋根玄関、玄関、式台から屋内を望む。内部は歴史資料館。時間あれば希望者のみ自由見学。希望しない人はバス駐車場周辺で買い物を楽しむ。
- 1 7) 時 分厳守。バス集合、出発、次の見学地上田城をめざす

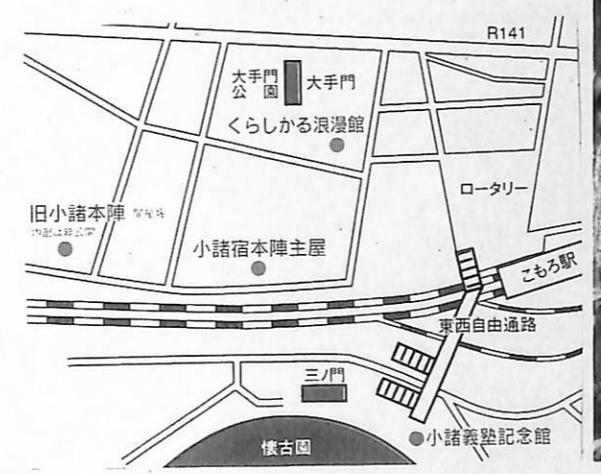
# 夢とロマンが息づく 高原の城下町

大手門



本陣

脇本陣



**御本陣代**

伊奈郡 中屋久次郎

中宿 御小諸本陣

巴屋六左衛門

**信州小諸市町**

脇御本陣

くめや(糸屋)重右衛門

江戸の方より右側

巴屋六左衛門・田中屋久次郎

諸国道中商人鑑 中仙道善光寺之部 全所収

巴屋は小諸本陣にあって泊宿(とまりや)で、市町の本陣が寛保二年の水害で流失したため、本陣代を務めるようになったとみられる。巴屋が出した客引き札が残っていて、それによると式台を備えた玄関があり、格式の高さを示している。客引き札には、泊宿が人足(にんそく)や馬士を買収して客を案内している実態が描かれている。本町は、問屋もあり旅籠(はたご)を中心とする町だった。旅籠の一つ田中屋は、信州伊奈(伊那)の菓屋が定宿にしていた。



小諸周辺街道図 金沢江戸間下街道図一部分

小諸市立歴史資料館

**小諸宿本陣主屋**

慶長十六年(一六一一)北国街道に宿駅伝馬制が敷かれて「小諸宿」が設けられました。その後「小諸宿」は、東への出入口として、また参勤交代や善光寺詣などの街道交通の要衝として隆盛を極めました。

参勤交代の大名などが宿泊した「小諸宿本陣主屋」は、本造切妻造瓦葺平屋建の豪壮な建物で、十八世紀末、十九世紀初頭の建築と推定され、当時は、市町に現存する国指定重要文化財「旧小諸本陣(問屋場)」のとなり建てられていました。

その後明治十一年(一八七八)に佐久市鳴瀬の桃源院に移築され、寺の本堂や庫裡として使われてきました。このたびは桃源院のご厚意により、建物式が小諸市に寄贈されました。市ではこれを受けて旧地にほど近い現在地に建物を移築再現し、往時の小諸宿繁栄をしのぶ貴重な資料とともに、歴史資料館として公開したものです。



本陣主屋

# 上田城

徳川家康、秀忠軍を寄せつけない、真田家の名城

## 1) 上田城=その歴史と概要

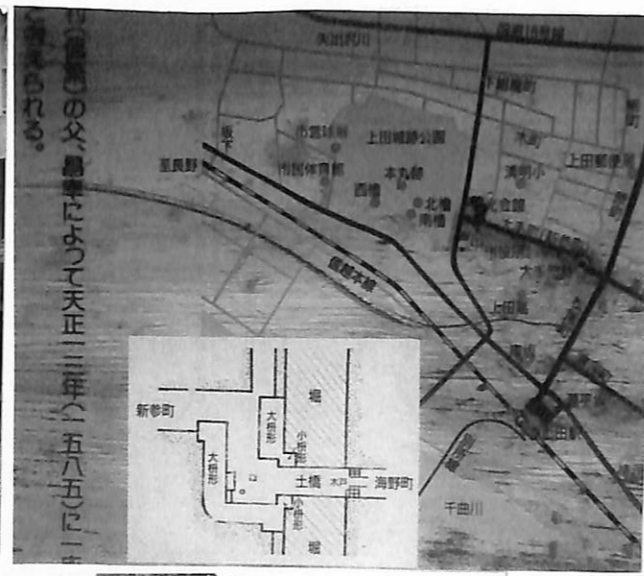
- ① 戦国後期、天正11年(1583)真田昌幸築城、江戸時代は仙石氏をへた松平5万3千石居城。
- ② 北国街道に沿った変形梯郭型?平城。千曲川を背負って本丸、2の丸、前面に3の丸を配した。
- ③ 上田城は戦国末期、地形を巧みに利用した難攻不落の名城。真田昌幸、幸村親子や真田十勇士活躍の舞台だが、徳川家康、秀忠2度にわたる合戦に勝利した歴史上の旧蹟としても名高い。明治6年廃城。しかし、本丸跡地が返還され、遊郭とされた2つの櫓も旧地に戻されている。いま本丸石垣上には正面櫓門、続多間櫓、南北西3櫓が連なり往時の偉容を偲ばせる。真田六連銭、仙石、松平氏と続いた「歴史の町」がいまも脈々と波打っている。

## 2) 大手門前(車窓から)

- ① かつての北国街道、中央通りの中央2丁目交差点を左折、直後にクランク。
- ② 小さな大手門公園が旧大手門跡でかつて前面に水濠を巡らせ櫓門、升形を置いた。一部を公園として保存、図面入りの市教育委員会説明看板などが旧跡を示す。ここからは城内3の丸、大手通りに沿って重臣邸が立ち並んだ。

## 3) 藩主御殿跡(上田高校)

- ① 江戸はじめ慶長年間に真田信之が建造した藩主の居館。真田家の転封で城は棄却されたが、藩主御殿は残った。仙石、松平家とも藩主は本丸に住まずこの御殿に居住した。水濠、土塁、表門が現存している。
- ② 土塁、水濠は江戸はじめ真田信之当時のもの、かつて御殿を1周したがおよそ半分が現存。白壁の土塀は江戸後期の建造。
- ③ 表門は江戸後期、寛政2年の建築。薬医門形式、屋根切妻造り、棧瓦葺き、3間1戸、中央大板扉ご門、両側くぐり戸、袖塀。前面の太い角柱に注目。表札は県立上田高校校門として活用されていることを物語る。
- ④ かつて門内に藩主御殿、蔵など、現在は校舎、運動場に。



上田城は、真田一族激闘の舞台。徳川軍を2度にわたり撃退し、「不屈の名城」とうたわれた。関ヶ原合戦後、徳川家に破却され、明治になって建物も失われていたが、いまでは、2基の櫓が「里帰り」し、櫓門も復元されて、かつての姿を取り戻した。

↑大手門公園

## 4) 藩校跡(上田市立第2中学校)

- ① 江戸後期の上田藩文武学校<明倫堂>跡。文化10年創立、朱子学、加藤額林。
- ② 明治学制発布後は松平学校、上田学校、上田尋常小学校、高等小学校、市立南小学校をへて現名に。

## 5) 2の丸堀と2の丸橋

- ① 大きな空堀が3の丸と2の丸を分ける。
- ② いま空堀=かつて水濠。城側に土塁を積む。箱堀。堀の古い形だが現在は遊歩道になっている。堀巾27m、深さ4m、水深2m。2の丸、3の丸濠の水は城下を流れる矢出沢川から引いた。
- ③ 空堀の遊歩道に下りて50mほど歩いて2の丸側に上る。遊歩道は上田温電の電車道跡でも。
- ④ 「時の鐘」を見上げる。城下から移築。時を知らせた。
- ⑤ 橋と枳形=中央に土橋。石垣で固めた内枳形左折れ?、食違い門?
- ⑥ 公園案内図で城の全体像を把握する。



藩主御殿跡



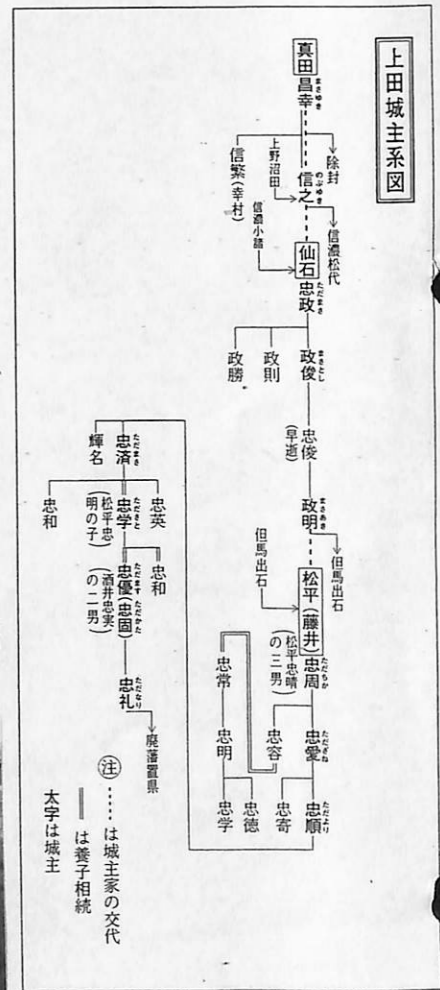
上田高校表門



藩校跡



→ 2の丸空堀



- 6) 本丸濠
  - ① 本丸濠=決戦に備えた最後の濠。濠巾27m、虎口櫓台高石垣積み、ほかは土塁、水叩き(水面までの石垣)。水源は天然の湧水だが、幕末の大地震で枯渇、いま観光用に地下水汲上げ? 虎口周辺は櫓台高石垣だが、ほかは土塁。
  - ② 空堀=堀巾32m、高さ6m。尼ヶ淵側の30mほどが空堀。理由は簡単、水を溜められない。
- 7) 本丸正門、東虎口櫓門
  - ① 櫓台石垣=虎口周辺の櫓台を壮大な高石垣で構築。石材は太郎山の緑色凝灰岩。打込ハギ
  - ② 真田石=北櫓石垣に組み込まれた巨石。城内最大で長径3m。上田城北にそびえる太郎山から切り出された。真田氏が松代転封のときこの石を運ぼうとしたがビクともしなかったという。
  - ③ 東虎口櫓門=虎口は城門を意味する。2の丸から本丸への正門。2階造り、入母屋屋根本瓦葺きシャチ、櫓門。階下に御門を開き、階上は武器庫、戦時は正面からの敵に狭間や格子から弓矢を射掛ける。平成6年史実に基づき正確に復元。
  - ④ 南櫓=2重櫓。入母屋屋根本瓦葺きシャチ付き、初重、2重とも武者窓のみ、飾破風、高覧なし、一部白漆喰、下見板黒塗り。内部はそれぞれ1室、戦時用武器庫で弓矢、鉄砲弾丸などをおいたほかは何もないガラン洞。明治6年の廃城でいったん上田遊郭に売却、移築され、客と遊女の嬌声が行交ったこともあったが、戦時下の昭和19年、新たに結成された上田城跡保存会が買い戻して24年に移築復元した。貴重な現存建造物。長野県宝に指定。
  - ⑤ 北櫓=南櫓と同じ構造。南櫓と同じ移築復元、現存建造物。長野県宝。
- 8) 上田城櫓門見学 (団体入場10分)
  - ① 南櫓、櫓門、北櫓を資料館として公開、簡単に一巡できる。券は後出「上田博物館」との共通券です。櫓の内部、屋根組、射撃用の弓狭間、鉄砲狭間、突上窓の武者窓格子、展示物などに注目
  - ② 南櫓、北櫓、西櫓の主要サイズ(3櫓とも同じ)=初重桁行8×梁行10m、2重7×9m 軒高初重4、2重8m、軒高11m。建坪初重80、2重58㎡



↑内濠 真田石→



上田城東虎口



櫓内部

観覧券  
(一般)  
250円  
No. 40454

本券で市立博物館・上田城櫓(4~11月開館)・山本郷記念館を観覧できます。



上田城櫓入場券

- 9) 尼ヶ淵大断崖
  - ① 本丸千曲川側の絶壁。高さ15m。当時ここに千曲川の分流があり深い淵を造っていた。難攻不落の名は千曲川側断崖、天然の要害によるところが大きい。
  - ② 鉢巻石垣=石積みは野面積み。度々の補修で石材の調達ができなかつたらしく千曲川の川石、溶岩、墓碑、石臼なども混じっているという。
  - ③ 犬走り
- 10) 真田神社と真田井戸
  - ① 真田神社=真田昌幸、信之、幸村と仙石、松平両家歴代藩主を合祀。
  - ② 明治6年廃城と同時に本丸全域を購入した丸山平八郎が神社敷地として寄贈。残地も遊園地として寄贈、のち刑務所、上田高校前身と変遷したがほぼ無傷のまま今日に伝わった。多くの名城が廃城とともに跡形なく取り壊されており、上田城の意義は大きい。
  - ③ 真田井戸=県下随一といわれる大井戸。直径2.2m、深さは計測不能という。井戸の途中に横穴があり、太郎山への抜道?とも。猿飛佐助伝説でも知られる。
- 11) 西櫓
  - ① 唯一、当時のまま今日に伝わる現存建造物。構造は南櫓、北櫓と同じ。
  - ② 櫓台から再度、尼ヶ淵大断崖を展望、地形がよくわかる。
- 12) 西虎口から本丸土塁を一周
  - ① 本丸濠と土居=美しい土居(土塁)。濠は素堀、堀土で土塁を築く。現存のほか土塁上に角櫓4基、2の丸にも8基、古絵図が伝える。4月なら桜花が咲き競う。
  - ② 西虎口から本丸土塁を一周。かつて白壁塀が巡る。北西角櫓跡、北東角櫓跡、鬼門避け角欠=災いやもののけが侵入してくる方向。切欠けを作って鬼門を封じる。



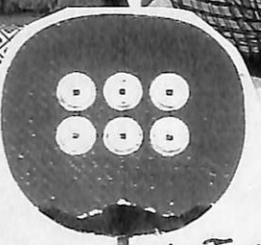
尼ヶ淵と西櫓



真田信之



真田昌幸



六正銃軍扇



西虎口側土塁



真田井戸



真田神社

- 1 3) 本丸跡
  - ① 規模=東西119×南北平均1.00m=総面積11,900㎡。南北段丘に分かれる。
  - ② 本丸跡=建造物がない空き地。再建の仙石氏が本丸御殿着手前に転封したため。
- 1 4) 2の丸でいったん解散 (自由見学=バス集合 時 分)
  - ① 2の丸上田博物館前でいったん解散。自由行動。集合時間厳守のこと。
  - ② 市立博物館=上田城櫓との共通入館券使用。歴代藩主の甲冑や刀剣、書物など、歴史資料を展示。
  - ③ 集合は2の丸門前の上田市観光会館駐車場。時間ある方はおみやげものをどうぞ。
- 1 5) 予備=時間許せば、上田城下の芳泉寺へ
  - ① 真田信之の正室、本多忠勝の娘で徳川家康養女として輿入れした小松姫が眠る。
- 1 6) 休会のご挨拶
  - ① 今回をもって4年間にわたった「城と史跡を歩く会」をいったん休会とします。長期間にわたりご協力ありがとうございました。

以上



織田信長所用草鞆 (重文)  
松平信一が信長より拝領



### 展示・収蔵資料概況

本館は、この地方のかつての主要産業であった養蚕・蚕種業の象徴、蚕室造りをかたどって設計されたもので、上田地方の中世以降の歴史を通観できる歴史・民俗資料および自然資料を収蔵・展示しています。

特色ある収蔵品としては、歴代上田城主の甲冑ほかの上田藩関係資料、織田信長所用草鞆(重要文化財)、染屋焼コレクション(重要民俗文化財)、正保の信濃国絵図(長野県宝)、養蚕資料、古文書類などがあります。

### 上田博物館

小松姫の墓

芳泉寺



時代の天体望遠鏡  
(国友藤兵衛作)



小松姫様墓



仙石氏霊廟



## 真田氏と上田城の歴史

真田氏は上田の北、現在の小県郡真田町に本拠をもつ一土豪でしたが、戦国時代末の幸隆のときに、信濃へ進出してきた武田信玄に仕えて頭角を現しました。武田氏の配下としてですが、真田氏は幸隆・昌幸の2代で真田の地から峠を越えた上野国(群馬県)の吾妻郡から沼田(利根郡)にかけて勢力を築いたのです。そして、天正10年(1582)の武田・織田両氏の相次ぐ滅亡による混乱の中で真田昌幸は、周辺の上杉・北条・徳川という強豪のはざまにあって目覚ましい働きをみせ、その勢力をさらに拡大し、天正11年には上田築城にとりかかり、上田盆地を中心とする小県郡一帯をもその支配下におさめました。こうして成立した真田領は石高は10万石たらずですが、上信の2国にまたがり、上田沼田間だけでも約100kmもあるという広大なものでした。

上田城と真田氏の名は、天正13年(1585)と慶長5年(1600)の2度にわたる徳川の大軍の攻撃を退けたことで、知られることとなりました。上田城跡は天守閣もありませんし、石垣も少なく決して見栄えのする城ではありません。しかし戦いに備えるだけでなく、領国統治の中心としても築かれた近世城郭としての平城でありながら、2度もの実戦の経験があって、しかも小よく大を制したこの上田城のような戦歴をもつ城は、全国でもほかに例はありません。

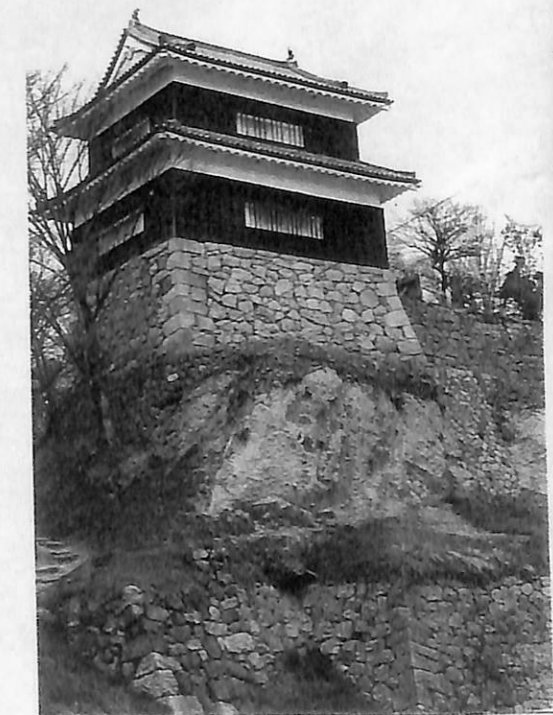
真田幸村 真田氏としては、昌幸の次男であった幸村が有名です。幸村は慶長5年の上田籠城戦(関ヶ原合戦の一環)後、天下を取った徳川家康によって父昌幸とともに高野山に流されました。そして、その山麓の九度山で長く暮した後、豊臣秀頼に招かれ、大坂冬・夏の両陣において、またも徳川勢を相手に大活躍しました。幸村はここで討死にしましたが名を後世に残すことになったものでした。

仙石氏 上田城は関ヶ原の合戦直後いったん破却されましたが、真田氏の後上田城主となった仙石氏により寛永3年(1626)からの工事で再建されました。現存する3棟の隅櫓(長野県宝)は、この時のものです。

松平氏 上田城主は宝永3年(1706)に仙石氏から松平氏に替りましたが、この松平氏の上田在城は明治維新にまで及びました。松平氏は三河在国時代からの徳川家の分流の一つ藤井松平氏で、初めて上田藩主となった忠周と幕末期の藩主忠優(忠固)の2人は幕府の老中を勤めています。



本丸東虎口の櫓門(復元)と隅櫓(県宝)



西櫓 尼ヶ淵跡より